

◎選択肢のある設問は、最も適当なものを選んでその番号を記すこと。

◎字数指定のある設問は、句読点や記号も一字とする。

【一】次の文章を読み、後の問に答えよ。

コミュニケーションにおける対面的状況の重要性を決定的に破壊したのが、ケータイの発明である。個と個がじかに、しかも顔をつき合わせずに情報交換できるようになった。個と個が直接に情報交換するという意味では、ラジオの発明以前の状況へ戻ったように思われるかもしれない。しかし、双方をまったく別なものに仕立て上げているのは、集団のまとまりを表示する境界というものが、ケータイの下では完全にとつばらわれてしまったという点にある。

自分たちが属しているというコミュニティの輪郭が見えないのである。イメージでいうと、果てしない砂漠のまん中で、見わたす限り人間が群がっているようなものである。

これは、現実にもその場に居合わせた私たちが実感している以上に、たいへんな変化を私たちの社会的意識にもたらしているだろう。

どこかに帰属しているという認識を持たなくなってしまった。規範やシンボリックな価値を失うのも、当然の成り行きというものである。A 無数の外部の他者を結びつけている媒体にすがりつくこととなる。そして媒体を介して、同じ対象を見たり、聞いたり、感覚することによって、帰属欲求を充足させようとするだろう。

技術の進歩、ひいては文明の発展は、人間の生活において選択の幅を拡大する方向に作用するはずである。確かに現代人のライフスタイルは、多様化を遂げた。しかしながら、それにもかかわらず、ある特定の時期の人々のスタイルがどれほど多様であるかを調べてみた場合、意外なほど誰もが斉一的な選択を行っていることに気づくはずである。

選択の幅が広いことと、それを人々が十分に活用しているかどうかはまったくの別問題である。むしろ、広さに人々はとまどっているようにも見受けられる。情報量はカクダンに豊富になった。むしろIT技術の進歩の賜物である。では、何をその中から選べばよいのか？

選ぶ行為の判断基準となるのは、他の人々がどうしているかに、ひとえに依存してくる。むしろケータイを介した情報が、その拠り所となる。そしてケータイは、膨大な人間をネットワークに含んでしまっている。

「彼(彼女)はAを選んでいるから、私は異なるBを……」という判断がその際になされることは、ほとんどありえないのである。結果として、群れる鳥や魚のように均一のファッションが流行し、また別のファッションに取って代わられていく過程が、はてしなくつづく。あるテレビタレントが人気を博すや、一週間を通じてさまざまな番組に登場し、すぐに消えていく。

ヒット曲も、それぞれのサイクルは短く、めまぐるしく変わっていく。選択肢の多様化は、流行の周期を短くするだけの効果をもたらしたにすぎず、人々はそれに追従するだけに精一杯という珍妙な事態を迎えるにいたっているのだ。

こうした現象は、他方で昨今の「自分探し」の流行と表裏をなしているように思われる。「自分というものがわからない」あるいは「自分が本当に何を求めているのか、自分でわからない」という声をしきりに耳にするようになった。帰属する対象を失って、人間は一見すると③に振る舞えるようになったかに見えるものの、実はまったく不な状態に陥って、自分が把握できなくなっているらしい。どうしてそんな事態になるのか。

それはひとえに、私たちが「自分」ととらえている認識が、本当は周囲からの働きかけによって大きく限定されているからにほかならない。

「自分がどういう存在であるか」という認識が本人に形成される過程を、インディアンポーカーにたとえた心理学者がいる。インディアンポーカーというゲームでは、まずトランプのカードを五枚ずつプレイヤーの手もとに取り、おのおのが好みの枚数を、伏せられた場の札と交換する。

この限りでは、ふつうのポーカーと同じルールに従っているにすぎない。ただ違うのは、最初に五枚を受けとったときに、即座に、そのうちの一枚を各プレイヤーが自分の額に張りつける点にある。B 相手方には見えるように、自分には見えないように張りつける。

だから手持ちのうち好みの枚数を場の札と交換するといっても、額にかざしたものをジョガイし、残りの四枚のうちで、好みの枚数を替えるのだ。

それから相手と、勝負にのぞむこととなる。それゆえ勝負を賭けているものの、個々のプレイヤーは自分の④の内のすべてを知っているわけではない。知らない部分がある。しかもそれが、相手にはまる見えになっているわけである。

反対に、自分にも相手の④の内の一部が明らかになっていて、それは相手にとって、うかがい知ることのできない内容となっている。

勝負に勝つためには、相手の顔色を見つつ、自分でもわからない自身の一部を推測することが不可欠となってくる。これこそ、自分と他人の認知に関する、というよりも社会における「自分」というものの理解の過程のすぐれたモデルだというのである。

二〇一〇年度 青山学院高等部 入学試験問題 国語 その三

問八 本文の内容に合うものを選び。

- 1 ケータイを持つことで旧来のコミュニティーに属せなくなった人々は不安を募らせてしまったので、ケータイを持つべきではない。
- 2 技術の進歩にともないライフスタイルは多様化し、次々に生み出される流行によってコミュニティーに古くからある規範が薄れてしまった。
- 3 「自分」というものは他者との関係において形成され認識されるものであり、自分自身にも推測することでは捉えきれない部分を含んでいる。
- 4 選択の幅が広がり個性が重視される傾向が強まったことで、逆に「自分が何を求めているのかわからない」という状況が生じた。

問九 a b にあてはまる語の組み合わせはどれか。

- | | | | | |
|---|---|----|---|----|
| 1 | a | 自発 | b | 経験 |
| 2 | a | 積極 | b | 一般 |
| 3 | a | 反射 | b | 論理 |
| 4 | a | 基本 | b | 客観 |

問十 A B にあてはまる語をそれぞれ選べ。

- | | | | | | | | | | | | |
|---|------|---|-----|---|-----|---|-----|---|------|---|----|
| 1 | けれども | 2 | しかし | 3 | しかも | 4 | そこで | 5 | たとえば | 6 | また |
|---|------|---|-----|---|-----|---|-----|---|------|---|----|

問十一 〳〵ア〴〵オのカタカナを漢字に直せ。

【二】次の文章を読み、後の問に答えよ。

観光名所とか、宴会とか、あるいはそんな名目がなくとも、とくにどうということはないのに心に残る光景とか、友達の顔とか、部屋のなとか、記憶しておきたいと思うものにカメラを向けてぱちりとシャッターを押す――写真に対して私が抱いているのはそれくらい幼稚なことではなかった。世にある写真のすべては、ポストカードでもアイドルの写真集でも人んちのアルバムでも、「記憶したい」と一度は願われた何ものかなのだろうと思っていた。

なんか違う、写真はもつと不気味な得体の知れないものかもしれない。印画紙の上にあるのは、「記憶したい」よりもつと広義な意味を持つ、それよりはるかに凶暴な欲求なのかもしれない。はじめてそんなふうに思ったのは、二十三歳のときで、それは『生へのまなざし』という写真集を見たからだった。

写真にほとんど興味のなかった私がなぜこの一冊を手にとったかという、かなり馬鹿馬鹿しい話で、そのとき文芸誌から自由選択で書評を頼まれたのだが、締め切りが三日後だった。本を読む時間を入れたら三日なんてあまりにも少ない。超のつく新人だったので、文句も言えず、本屋にいき、写真集ならすぐ見られてすぐ書けると思い、この赤い表紙の一冊を手にとったのだった。しかしここにおさめられた写真は、小説よりもずっと饒舌^{じょうぜつ}で、三日間、ずいぶん苦労したことを覚えて

いる。
饒舌^{じょうぜつ}な写真というものを、このとき私ははじめて見たのだった。饒舌なのにひそやかである。こわいほどの静けさである。一番心に引っかけたのはセバスチャン・サルガドの写真だった。好きだというのでも、共感を持つというのでもない。モノクロ写真が、見えない手を伸ばしてきてこちら側の胸ぐらをつかむ。見る、と言う。目を背けたのに背けられない。そんな印象を持った。私がそれまで見てきた数少ない写真で、そんなふうにこちらに強く入りこんでくるものはなかった。「記憶したい」より、よほど強いものがある。

この一冊におさめられた彼の写真はたった数枚だが、どこか芝居っ気がある。 ④ なものが感じられる。しかし、伝わってくるのは不思議と、生々しい現実感なのだ。これって何かに似ているな、と考えると、そうなのだ、物語に似ている。

『生へのまなざし』という、二十三歳の私が手にとった写真集は、一見コンセプトアルートのようだが、けれど幾度も幾度も眺めていると、じつに物語的だ。世界と相対するのは自分であり、そこで生じた内的動機がシャッターを切らせ、フィクションを通して、個人が切り取ったある現実の手触りを伝える。閉じこめたと同時に、何かを解き放つ。確実に。

ここで写真は、「記憶したい」よりももつと強く、「伝えたい」という意味合いを持つ。それは不特定多数に向けたメッセージなんて生やさしいものではなくて、もつと個人的で切実な気分なのだと思う。「記憶したい」は、ある瞬間をしかとらえないが、「伝えたい」は連続性を持つ。その連続性が、瞬間ではなくある断面をとらえる。

この写真集に触発されて、その後写真に興味を持ったということはしかしなくて、どちらかというと、意識して距離を置くようになった気がする。もちろん、写真を見る機会はごくごく自然にあるが、積極的に写真に触れるようなことはしない。たぶん、その一冊の写真集が私に与えたものが、あまりに強烈で、その強烈さは私にとって理解不能だったんだろうと思う。

つい三年ほど前、長島有里枝の『家族』という写真集を見ていて、『生へのまなざし』と似たようなことを思った。これは、どこの家にもある家族アルバムみたいなテイサイをとって、おさめられた写真は、おそらく意図的に、カメラと縁のない私たちが単純に「記憶したい」と観光場所にレンズを向けるような、あるいは酔っぱらって友達の顔を撮るような、身近に感じられるものばかりである。

しかしこの一冊を見てみると、知らない家族の日常や非日常が、自分の個人的なそれとかぶり、なんともいえない気持ちになってくる。家族とともにいたころの、苛立ちとか馬鹿馬鹿しさとか、安心感とかサツカクかもしれないが幸福感のようなものが、じつに生々しくたちあらわれて、知らず、「家族」というものの奇妙さを再体験させられる。

記憶したい個人的な瞬間に見せかけて、伝えたい世界の⑦がここにある。

『家族』は描かれているのが現代の日本の家庭なので、『生へのまなざし』よりはよほど身近で、その強烈さも理解可能なのだが、これもまた、私に写真を積極的に結びつけたかというところなことはない。あいかわらず、目に入ってこないかぎりは、出向いていって写真と向き合うようなことを私はしない。

たぶん、写真という媒体と私個人のあいだには、途方もない距離がある。写真を撮るといふことと、文字を書くといふことについて、一時期考えたことがある。私はよく旅に出るのだが、どの旅にもカメラは持っていく。「記憶したい」という幼稚な欲求のもとにシャッターを押し続けているわけだが、しかし、今日の前に広がる光景を、文字で記憶しようとしたらどうなるのだろうか、いつも考える。文字は七面倒くさい。

モロッコの田舎の、土埃舞う路地から路地へ、楽器をかき鳴らし結婚式のパレードが通る。親族のばらまく菓子ねらつて子どもたちが裸足であとを追い、曇り空がどんどん低くなってきて、土埃のなか、どことなくみすばらしいイシヨウをまとった花嫁が笑っている。こういう光景を垣間見たときに、カメラを向ければ一瞬でとらえることができるし、ずぶの素人の私には思ったような写真が撮れずとも、しかしその写真を見返すとき、テンコウや湿度やにぎやかさや埃っぽさは、記憶がホソクしてくれるから、ほぼ見たまま、思ったままを写真の上に再現させることができる。しかしそれを、文字だけで記憶、もしくは再構築しようとする、じつに時間がかかるし、しかも、言葉を重ねれば重ねるだけ見たものとずれていく可能性のほうが多い。となると、写真は言葉を奪うのではないか、と思ってしまうのである。奪われちゃいけない、とも思うのである。たいへん原始的な考えかただけども。

積極的に写真と向き合わない、というのも、そのあたりが関係しているのではないかと思う。言葉よりも強烈に物語を構築している写真に触れるのが、きっとこわいんじゃないかと思うのだ。

(角田光代『何も持たずに存在するといふこと』)

問一 —— ①の「義」と同じ意味で使われているものはどれか。二つ選べ。

- 1 講義 2 道義 3 義兄 4 正義 5 異義

問二 —— ②を比喩的に述べている部分を、この後から三十二字で抜き出し、最初と最後の四字を記せ。

問三 —— ③は、どのようなものをいうか。

- 1 被写体の人生が表れている写真
2 撮影者の意図が表れている写真
3 撮影時の状況が表れている写真
4 撮影後の余韻が表れている写真

問四 ④に入る語はどれか。

- 1 攻撃的 2 開放的 3 抽象的 4 作為的 5 幻想的

問五 —— ⑤と同じ内容を述べている部分を本文中から十字以内で抜き出せ。

二〇一〇年度 青山学院高等部 入学試験問題 国語 その五

問六 — ⑥はどれか。

- 1 家族とは私的な関係でありながら、どの家族とも意外な共通点があるという奇妙さ
- 2 家族とはさまざまな感情を生み出す、とらえどころのないものだという奇妙さ
- 3 家族との思い出は、不思議と遠い昔のことに感じられるものだという奇妙さ
- 4 家族との記憶は、生々しくよみがえるものほど実際とは異なるという奇妙さ

問七 ⑦に入る漢字二字の語を本文中から抜き出せ。

問八 — ⑧は、どのようなことが言いたいのか。

- 1 写真という媒体を使いこなすだけの技術がないということ
- 2 写真という媒体を幼稚なものに見なしているということ
- 3 写真という媒体は自分の表現方法とは異なるということ
- 4 写真という媒体は言葉による表現とは相容れないということ

問九 — ⑨はなぜか。その理由にあたる一文を本文中から抜き出し、最初の五字を記せ。

問十 — ⑩のように考えるのはなぜか。次の空欄にあてはまることばを本文中から十五字以内で抜き出せ。
写真は するから。

問十一 — アくオのカタカナを漢字に直せ。

【三】次の文章を読み、後の問に答えよ。

志賀僧正、もとより筆^{注1}箒をにくむ人なりけり。ある時明月の夜、湖上に三船をうかべて、 A ・和歌・頌^{注2}物の人をのせて宴遊しけるに、伶人^{注3}等その舟にのらんとする時は、「この僧正は筆箒にくみ給ふ人なり。しかあれば用枝はのるべからず。事にがりなんず」とてのせざりければ、用枝、「さらば打物^{注4}をもこそ仕^{注5}らめ」とて、しひてのりてけり。やうやう深更におよぶほどに、用枝ひそかに筆箒をぬきい出して、湖水にひたしてうるほしけり。人々見て、「筆箒か」と問ひければ、「さにはあらず。手あらふなり」とこたへて、 B になきていにて居たり。しばらくありて、つひにね^{注6}とりいだしたりければ、かたへの楽人ども、「さればこそいひつれ。よしなき者をのせて、興^{注7}さめなんず」と、色^{注8}をうしなひてなげきあへる程に、その曲めでたくたへにしてしみたり。聞く人みな涙おちぬ。としごろこれをいとほる僧正、人よりことに泣きていはれけるは、「正教に筆箒は迎^{注9}陵^{注10}頻^{注11}の声を学ぶといへる事あり。このことを信ぜざりける、口惜しき事なり。いまこそ思ひ知りぬれ。今夜の纏^{注12}頭^{注13}は他の人に及ぶべからず。用枝一人にあるべし」とぞいはれける。この事を後々までいひいだして、泣かれけるとぞ。

『古今著聞集』

注1 筆^{ひちりき}箒^し：雅楽の演奏に使う笛

注2 頌^{しょうもの}物^{ぶつ}：漢詩文

注3 伶人^{れいじん}：演奏者

注4 打物^{うちもの}：打楽器

注5 迎^{むかひ}陵^{りやう}頻^{ひん}：極楽にすむという人面鳥身で美声を持つ霊鳥

注6 纏^{てん}頭^{とう}：ほうび

問一 — ①は a 誰が、b どのようなにして船に乗ったということか。

- | | | | | |
|---|---------|---------|---------|---------|
| a | 1 志賀僧正 | 2 伶人 | 3 用枝 | 4 聞く人 |
| b | 1 やすやすと | 2 むりやりに | 3 あせりつつ | 4 おずおずと |

二〇一〇年度 青山学院高等部 入学試験問題 国語 その六

問二 — ②の意味はどれか。

- 1 ときおり
- 2 とうとう
- 3 だんだん
- 4 すぐさま

問三 — ③の訳はどれか。

- 1 何食わぬそぶり
- 2 何やら怪しいそぶり
- 3 何か悲しそうな様子
- 4 何も考えていない様子

問四 — ④を漢字で書け。

問五 — ⑤の意味はどれか。

- 1 つまらない
- 2 ずるい
- 3 いやしい
- 4 だらしない

問六 — ⑥はどのような気持ちの表れか。

- 1 怒り猛る
- 2 驚き恐れる
- 3 泣き悲しむ
- 4 あきれ蔑む

問七 — ⑦の基本形は「いとふ」だが、これと同じ意味を持つことばを本文中から三字で抜き出し、基本形で答えよ。

問八 — ⑧からうかがえる気持ちはどれか。二つ選べ。

- 1 困惑
- 2 失望
- 3 感動
- 4 悲哀
- 5 安心
- 6 後悔

問九 — Aにあてはまる遊びはどれか。

- 1 双六
- 2 管弦
- 3 貝合
- 4 俳諧

問十 本文はどのジャンルにあたるか。

- 1 歌物語
- 2 日記
- 3 紀行文
- 4 説話